

自然の魅力が加わった新・豊田市

社団法人中部開発センター

客員研究員 青山 征人

中部開発センターでは、景観に関する意識調査やセミナー、シンポジウム、機関誌を通じて、景観法の仕組みや各地の事例を紹介するなど啓発活動を行ってきたが、今後は中部圏各地の具体的な取り組みを紹介することによって、景観意識の高揚、「美しい国、まちづくり」を推進していきたい。

はじめに

愛知県豊田市は「クルマのまち」である。トヨタ自動車の国内工場12カ所のうち、7カ所までが豊田市に集中する上、部品メーカーや設備・物流業が多数立地する。市内で働く従業員数10万人のうち8万3,000人が自動車関連（05年工業統計調査）に従事する自動車特化都市であり、豊田市の製造品出荷額11兆433億円は全国1位。その豊田市が05年4月に周辺の旭町、足助町、稲武町、小原村、下山村、藤岡町の6町村と合併し、面積で県下最大の918km²、人口で名古屋市に次ぐ42万人、市域の70%が森林、8%が農地という緑滴る都市に変貌した。この市を支えるトヨタ自動車グループ（日野自動車、ダイハツ工業を含む）の販売台数が2007年度で943万台を記録し、米国ゼネラル・モーターズ（GM）に8万台の差をつけ、世界の頂点を極めた。米国市場における販売減など不安定要因はあるものの、ここしばらくトヨタの優位は揺らがない。豊田市では自動車もたらす税収

が豊かなうちに、少子化対策や次世代産業の育成など将来を見据えた計画を推進するため2017年を目標年次とした第7次豊田市総合計画を策定した。少子・高齢化、グローバル化など経済社会環境が大きく変化していることを重視し「重点を絞り」、「限られた資源の効率的配分」を行っていく。この一環として今年10月から、市域全体を対象とした「豊田市景観計画」を施行し、景観保全に取り組む。

I 都市と農山村の共生

1 拳母の名前は『古事記』にも

「あまり変わってない」というのが20年ぶりに訪れた豊田市の偽らざる印象だった。かつて、仕事柄1週間に2、3回はトヨタ自動車及び関係先を訪れたし、今も時々周辺には行くが、中心市街地



建て替えられたトヨタ自動車本社。これまでの4階建て本社に比べれば大きいですが、決して威圧的な感じはしない。

までは足を延ばさなかった。その頃に比べ建物、工場が建て直され、周囲に緑が増え、産業廃棄物を取り除かれたことは確かだが、市内を南北に貫く国道248号線始め、主な道路には相変わらず、屋外看板がびっしり。中には店舗全体が看板になっているものもある。また市街地の建物も、2階建て民家の密集地に高層マンションが建つなど高さがばらばらで、落ち着かない。自動車産業が急激に拡大したため、インフラや住宅整備を優先させた結果、計画的な市街地整備や景観まで手が回らなかったものと思われる。豊田市では広域合併を機会に新たに総合計画を打ち出した。

8世紀初頭に書かれた歴史書『古事記』に「大中津彦命（垂仁帝4子）が許呂母（ころも）の長官だった」として登場するように、西三河一帯は早くから開け、豊田市には酒呑（しゃちのみ）ジュリンナ遺跡、梅坪遺跡、今朝平遺跡など旧石器から縄文にかけての貴重な遺跡が残されている。温暖な気候のため木の実など採取する食物や漁業資源に恵まれていたためと見られ、知多半島や三河湾で海水を煮詰めて作られた塩は矢作川や後の中馬街道（現国道153号線）を利用して信州に運ばれた。ヤマト政権が樹立されると尾張、三河はその支配を受けることになり、平城京出土の瓦に「延喜12年（793）賀茂郡拳母郷」の名が見える。時代は下って室町期に入ると幕府の荘園支配にはころびが生じ、各地で守護職を巡る争いが頻発。応仁の乱（1467）を挟んで尾張は守護斯波家と守護代織田家が20年に亘って争い、また三河は守護細川氏と前守護一色氏が争った。乱後の三河は在地勢力による群雄割拠の戦国時代に突入、そのなかで豊田市の松平郷を拠点とした松平一族が西三河一帯に勢力を拡げていった。家康から数えて8代前の初代・親氏は時宗の僧として松平郷に流れ着き、松平太郎左衛門の入婿となり親氏と称して、実力を発揮し、周辺を支配下においた。3代信光が矢作川を越えて安城城を落として松平氏発展の基礎を固め、7代清康は岡崎に本拠を移し、分裂状態が続いていた三河を統一の方向に導いた。しかし清康が25歳の若さで殺害されると松平軍は総



豊田市の国道は大型看板が林立する。景観の問題より、信号機や交通標識を見逃しかねない。

崩れになり、清康の嫡子広忠は駿河の今川を頼り、その子家康は織田、今川が争った桶狭間の戦い（1560年）まで義元の手元に置かれた。この間、織田、松平氏の同族争いや他の勢力との争いは熾烈で、西三河でも多くの戦が行われた。

徳川政権が樹立されると、拳母には、慶長19年（1614）に三宅康貞が武蔵国・瓶尻（みかじり）から転封され、1万石で拳母藩を立藩した。一時幕府の直轄地となったが、1681年に本多忠利が磐城国・白河城から転封し、3代に亘って統治。1749年に本多が移ると、上野国・安中城主である内藤政苗（2万石）が入封し、幕末まで内藤家が統治した。政苗は周囲400間（720m）の堀を巡らし、三重の本丸、隅櫓などからなる桜城を計画したが、度重なる矢作川の洪水によって断念し、別の童子山に築いた。今も豊田信用金庫本店前に隅櫓跡を残す。

2 広大な用地を求めて進出

豊田佐吉の創業精神を受け継いだ息子の喜一郎は、G型自動織機の特許を、英国のプラット社に10万ポンド（当時の100万円）で譲渡するとともに、その資金を基に小型ガソリンエンジンの開発に取り組んだ。それから3年後、1933年9月1日に豊田自動織機製作所の片隅に自動車部を設置したのがトヨタ自動車の誕生である。社内ベンチャーの走りである。35年にはA 1型乗用車の試作第

1号とG1型トラックの試作第1号を完成、刈谷組立工場を建設して本格製造を開始した。当時、GMやフォードこそ量産化技術を確立して大量販売を開始したが、わが国では三井、三菱、住友といった財閥でさえ事業化には二の足を踏んだのである。自動車は部品点数が数千点に及び、それぞれ材質、鋳鍛造技術、加工技術が違う総合力が必要で、それに使用する工作機械は輸入に頼らざるを得ないなど、とても日本の現状では無理だと判断した。後年喜一郎は「こんな事業をむこうみずにやる者はよほどアホーだと、私自身思っている。(略) 当然儲かる事業を、当然な方法でやっていくよりも、誰もやらない、またやりにくい事業をものにするところに人生の面白みがある」と語っている。その意気込み通り、同業他社が外国からの技術導入や外国車のノックダウンから出発したのに対し、トヨタは喜一郎の「日本人の頭と腕だけで乗用車をつくりあげてみせる」ことにこだわり、今日の地位を固めた。その喜一郎は自動車部発足と同時に、先の日途が立たない時期に「大規模工場での大量生産こそ国産自動車工場確立のカギ」と、建設にふさわしい広大な用地を探し始めた先見性には驚く。刈谷市、名古屋市大高、東浦町などいくつか候補に上がったが、結局選んだのは挙母町(豊田市)だった。

3 選んだ理由は地元の熱意

喜一郎が選んだ理由は①スイス、米国の例をみても、精密機械工業は都会を離れた地の純朴な従業員の、父子伝承の技能の上に成り立つ②工業立国とはいえ、貴重な農地を工場敷地につぶすことは避けたい③挙母近在の農家の次・3男に仕事を与え農村問題解決の一助とするということである。

昭和初期の日本は、世界恐慌の影響を受け、物価の下落、輸出不振で経済は破綻し、失業者が街にあふれた。1892年(明治25)に町制を施行した挙母町は養蚕が盛んで、全国でも指折りのまゆの取引地として発展してきたが、この不況の影響を

モロに被った。80%近くを輸出し、外貨の稼ぎ頭だった対米向け生糸輸出が減り、価格が大暴落したのである。「挙母町史資料集」によると、繭価は、1927年に平均7円60銭(3.75kg)していたものが、30年には上クラスが2円40銭、下クラスが1円80銭で平均2円20銭。3分の1以下に暴落したのである。養蚕を産業としていた西加茂一帯、とくにその中心である挙母の町は火の消えたような不景気で、「破れころも」とまでやゆされる有様だった。そこで当時の中村寿一町長は繁栄を取り戻す起死回生のチャンスとばかりに、豊田自動織機自動車部の誘致にかかった。同自動車部は設置されたばかりなのに、その2カ月後の33年(昭和8年)11月には誘致を申し入れたのだから中村も素早い。34年には正式に工場誘致委員会を結成、町と豊田自動織機との間で「土地売買に関する申合書」を取り交わす。しかし発展のチャンスを逃してはならないと意気込む中村町長以下挙母町の思惑とは裏腹に180人を超える地主との用地交渉は難航し、一時は豊田側が契約を取り消す手紙を中村宛に送ったこともある。中村の体当たりの買収交渉が地主を動かし、豊田側も「挙母町の人たちの熱意と実行力を評価した」(トヨタ自動車20年史)。35年12月に58万坪(191万㎡)の買収が完了、整地にかかるとともに、37年8月には豊田自動織機から分離して、資本金1,200万円のトヨタ自動車工業が設立された。そして38年11月には総工費4,500万円をかけた、建屋面積6万坪(10万8,000㎡)、従業員5,000人の専用工場が完成した。中村以下挙母町の熱意がなかったら実現しなかっただろうし、後年トヨタが米国に単独進出する時、ケンタッキー州を選んだのもコリンズ知事以下の熱意が功を奏したのである。

4 国内12工場のうち7工場が豊田市

戦後のトヨタの年間生産台数は45年の3,275台、46年5,821台、47年3,922台と販売不振が続き、50年3月期決算は赤字決算に陥った。8,000人の従業員を雇用する余裕はなくなり、給料の遅配、分

割を行なった。労働争議に発展し、工場のある論地が原に赤旗がはためいた。希望退職者の募集（2,146人）、販売会社の分離などで合意し、2カ月にわたった争議を終結したが、50年6月にはトヨタ車生みの親である喜一郎は責任を負って辞任した。この苦い、不幸な経験がその後の再建に向けての起爆剤になって、労使一体となったモノづくりが進み、朝鮮動乱や戦後復興の需要増と相まって拡大路線を歩むことになる。59年には元町工場、65年には上郷工場、66年には高岡工場、70年には堤工場と次々新工場を建設、現在12カ所ある工場の内、7カ所まで豊田市内に集中する日本一の自動車生産都市となった。トヨタ車の国内生産分422万台（07年実績）のうち半数は豊田市で生産する。トヨタは工場や従業員住宅を建設するだけでなく、トヨタ会館やトヨタ鞍ヶ池記念館のPR施設、トヨタ記念病院、トヨタスポーツセンターなど文化、福利厚生施設などを建設している。

5 観光資源は美しい自然

新豊田市の大きさを知るため、西の端、八草から猿投グリーンロードと国道153号線を使って東端の稲武までクルマで走ってみた。豊田市の東西の長さは直線距離にして50kmあるというから、道路の長さとなると60kmを超えるだろう。新緑シーズンしかも快晴のウイークデイとあって、行き交うクルマも少なく、ゆったりと緑のみずみずしさを満喫した。42万人の中核市でこれだけ自然が残されているところは少ない。まず猿投神社に寄る。日本武尊の兄、大碓命などを祭神とし、猿投山山頂の奥宮など三社からなる。本殿までの参道200mは樹齢数百年の巨大な杉並木となっており、創建の古さを物語る。人がほとんど居ないのがいい。次に巴川に面した足助に立ち寄る。香嵐溪と呼ばれる峡谷は兩岸をもみじの木が覆い、秋の紅葉はそれこそ川面を赤に染めつくすと言われるが、春の新緑もまた見事。香嵐溪の中心に三州足助屋敷がある。茅葺き屋根の豪農邸を再現した

もので、母屋を囲んで土蔵、牛小屋、仕事場などが並ぶ。昭和30年代までのモノづくりを再現・実演してくれるのはありがたい。仕事は傘貼り、機織、紺屋、炭焼き、かご編み、桶づくり、紙漉き、わら細工、鍛冶屋、木地屋の10種に及ぶ。どの仕事もちょっと以前までは存在した仕事だし、現在も道具だけなら資料館あたりに残っているだろうが、ふいごを使って鉄を鍛えるとか、かご編み、わら草履づくりなどは近年なかなか見られない。子供にモノづくりの原点を教えるには最適。足助地区は塩を馬で信州に運んだ中馬街道沿いにあり、昔ながらの家並みが残る。さらに153号線をしばらく走ると山際に曹洞宗大鷲院が見えてくる。山崩れのため諸堂が壊滅して、慶長7年(1602)に再建されたもの。山門、本堂とも大きくはないが、なかなかの風格だし、本堂の脇から山に登る道沿いには愛知県には珍しい磨がい仏が建ち並ぶ。稲武には古橋懐古館がある。古橋家6代源六郎暉兒（てるのり）が文久年間に江戸に下って平田門下生になった時、国学者や志士と交わり、賀茂真淵、本居宣長、中江藤樹、西郷隆盛、坂本竜馬などの遺墨を集めたコレクションだが、残念ながら達筆すぎて読めない。稲武町には、武田勝頼が敗走の途中に休息した武節城址、しだれ桜が美しい瑞龍寺、珍しいものでは八幡神社の杉・松の「合体木」がある。

復路には松平郷と拳母神社に立ち寄った。松平郷は、松平家の菩提寺である高月院や家康を祭つ



徳川家康が神領を安堵した猿投神社の本社。参道の杉並木がすばらしい。



「香嵐溪」は愛知県を代表する景勝地。秋は紅葉が巴川の川面まで染めつくす。



家康や松平氏始祖親氏を祭る松平東照宮。松平氏発祥の地である。菩提寺の高月院や墓所もある。



稲武の武節（ぶせつ）城址。長篠の戦で敗れた武田勝頼が敗走する折、この城で休息し、梅酢湯を飲んで甲州へ帰ったと伝えられる。

た松平東照宮、資料を集めた松平郷館があり、また拳母神社は、創建が1100年代の鎌倉期に遡るといふ由緒ある神社で樹齢650年といわれるクスノキが立派。こうしてみると、美しい自然景観とともに、歴史的建造物は結構多く、観光都市としての魅力は十分備える。

II どのような都市を目指すか

1 「人が輝き 躍進するまち」づくりを

新しい豊田市は産業、人口が集中する都市部と、緑豊かながら過疎化が進む農山村部という二つの顔を持つ都市となった。水と油とはいかないまでも、経済基盤や文化が大きく違う地域に画一的な行政サービスを行うことは無理がある。そこで第7次豊田市総合計画では「都市内分権」という仕組みを導入して、地域の特徴を尊重しながら、地域課題に対しては住民自らが考え、行動するなど地域力の発揮を求める。住民一人一人が課題や地域おこしに参加し、「協働」することで個性豊かな地域をつくり、安全・安心な暮らしを確保しようというもの。このため土地利用に当っては、市内を4つのゾーンに分け、地域の特性に応じて都市機能や生活機能を集約する拠点と核（都心、産業技術核、拠点地域核、地域核）を設定し、それらを基幹交通でネットワーク化する。具体的には、①市の「顔」ともいふべき豊田市駅及び新豊田市



稲武・八幡神社の杉（向って左）と桧（同右）の合体木。

駅を中心とする地域を都心と位置付け、区画整理事業などで高度な、魅力ある商業・業務地区を整備する②既存の工業団地やインターチェンジ周辺に新たな工業用地を設け、新産業の誘導を図る③農山村部においては地域資源を活用し、農林振興、観光交流を促進する、などである。

2 豊田市景観計画を策定

豊田市は1988年に「豊田市都市景観基本計画」を策定し、景観についても豊田市屋外広告物条例を設けて規制してきた。基本計画が20年を経過したのと、05年には周辺6町村と合併し、広大な森林など新たな要素が加わったことから景観法に基づく景観計画を作り直すことにした。それによると、計画の区域は豊田市全域を対象とするが、市

街地景観、山林景観など地域によって特徴があることから建築物の行為制限などは一律に適用することは難しく、特色に応じて区分したゾーンごとに行っていく。そのゾーンは総合計画の土地利用構想で分けした、「一体的市街地誘導ゾーン」、「田園・都市共生ゾーン」、「都市近郊自然共生ゾーン」、「森林環境共生ゾーン」の4ゾーン。建物の高さや、色彩などそれぞれ基準を設けており、それを超えるものについては行政の指導を受ける。とくに外壁、屋根などの色彩については派手な色を用いないこととし、行政が是正勧告を行い、場合によっては変更命令を行うこともある。こうした計画を進めることで、目指すべき景観像「人と自然と産業が響き合ういちばん美しい町・豊田」を実現していく。



トヨタ創業期の歩みを展示したトヨタ鞍ヶ池記念館には創業者・豊田喜一郎の住居を移転。



挙母神社の門前町として発展した桜町商店街は街並み整備事業を取入れ、道路拡幅や電線の地中化を行った。



源義経の家臣鈴木重善が義経討死のふ報を聞き、この地に隠れ住んだといわれる挙母神社。歴代の挙母藩主が崇敬した。



市制50周年記念としてオープンした豊田スタジアム。FIFAの建設基準に準拠し、サッカー、ラグビーなど国際試合に対応、収容人数は4万5000人。

■ 感想

今回豊田市を取り上げたのは、奇妙な話を聞いたため。トヨタ自動車東京本社にいた海外営業部隊が名古屋駅前のミッドランドスクエアに引き上げてきたが、従業員のうち豊田市に自宅を持つ人でも、豊田市に住まずに名古屋市内を選ぶという。しかも家族を残しての単身赴任者が多い。理由はどうも豊田市に都市としての魅力がなく、子供の教育も東京、名古屋で受けさせたいということらしい。トヨタマンの「豊田離れ」が進んで、果たして将来も豊田市は安泰なのか、気にかかった。道路沿いの看板や不揃いな建物を見る限り、文化や歴史性、ゆとり、やすらぎといった、本来大都市が持つ魅力が豊富とはいえない。トヨタが快調で、市の財政が豊かなうちに、「誰もが住みたい魅力ある町」づくりをしてもらいたい。トヨタは九州、北海道、東北に国内展開するとともに、海外では52カ所の製造拠点を設け、国内より海外が主力になりつつある。

最後に都市の魅力のひとつでもある、味について「豊田市には美味しい店がない」との批判を聞くが、そんなことはない。市役所に近い関西割烹の「味里」で食べた「せいろ蒸し定食」(1,500円)は絶品だったし、稲武地区のどんぐりの里いなぶに近い「さぬき亭」の天ぷらそば(1,000円)も美味しかった。

参考文献

- 「挙母市資料集」挙母市教育委員会 (1956年)
- 「トヨタ自動車20年史」トヨタ自動車工業 (1958年)
- 「豊田の史跡と文化財」豊田市文化財保護審議会、豊田市教育委員会 (1993年)
- 「愛知県の歴史」三鬼清一郎、山川出版社 (2001年)
- 「豊田市トヨタ町1番地」読売新聞特別取材班、新潮社 (2003年)

市長インタビュー

豊田市長 鈴木公平氏に聞く



自動車づくりで得たエレクトロニクスなど新しい産業を育成する。そのためには「産業用地を造成していく」と鈴木公平市長。

略歴

- 1954年 旧高橋村役場入所
- 1965年 愛知大短期大学部法経科卒業
- 1971年 豊田市秘書課長
- 1987年 同 経済部長
- 1988年 同 総務部長
- 1992年 豊田市助役
- 2000年 豊田市長
- 2004年 同 再任(2期)
- 2008年 同 再任(3期)

愛知県豊田市出身、69歳

—鈴木市長は地元で生まれ、地元で育ち、地元で就職したと聞きました。小さい頃と比べ豊田市は変わりましたか。

鈴木 上郷地区で生まれ、旧高橋村へ就職して挙母市と合併、以来豊田市一筋です。この辺りの農家は農業用水の確保に苦勞して、稲作というより養蚕がメインだった。養蚕は朝早く、夜遅い苦しい作業の上、価格の変動や化学繊維の発達に左右されるなど大変な仕事だった。矢作川や巴川に

面したところは水運が盛んで、商業機能が発達して活気があった。戦後、トヨタ自動車が高度経済成長やモータリゼーションの波にのって、工場を次々拡張していくことは驚きだった

一広域合併して3年経過しました。予定通り計画は順調に進んでいますか。

鈴木 目論んだことは大体計画通りに進んでいると思う。プロジェクトについては着手したばかりの案件があるものの、それでも大きなズレはない。自治体経営に関しては、豊田市と旧町村の財政基盤にそれぞれ違いがあり、政府の財政支援策、激変緩和措置を利用して揃えてきた。職員数についても、仕事の見直しと定年退職で5年間に5%削減する計画にしていたものが、3年間で達成、予想より早く進んだ。消防、子育て支援、福祉分野のように増員した職場もあるから、それを考慮するとかなりの数。

一2008年度予算が決まりました。一般会計1,712億円、前年比2.4%増という積極予算です。その特徴なり、市長が力を入れる項目を教えてください。

鈴木 今年の予算編成の方針は、財政の健全化、予算の重点化、効率化である。市債、長期債務を減らすと同時に、将来に向けての資金を確保し、第7次豊田市総合計画に掲げた施策に着手に取り組んでいく。豊田市は、従来型行政の常識や慣習を断ち切り、仕事の進め方、職員の意識を変える「行政経営システム」を立ち上げており、それに沿って予算編成している。事業評価をしながら、予算、職員などを適切に配分し、効率的な運営を心掛けている。そんな中で重点的に取り上げたのは、まず第1に子育て支援や安心なまちづくり。子育てについては、無料の妊婦検診回数をこれまでの5回から14回に増やし、子供の医療費無料の対象を6歳から中学校卒業(15歳)まで拡大する。核家族化が進む中で、子供たちの健康状態、異変を早期に把握してもらうためにすみやかに医師の診断を受けてもらうことが目的。また公立の保育

園と幼稚園を「こども園」に統一して保育時間を午後7時とした。保育時間やサービスに応じて費用を負担してもらうが、個人負担は少なくして、その分市が負担する。現在、私立にも要請しており、伴う費用は市が補助する。バラマキ行政といわれるかも知れないが、市民の声を聞いて、議論もし、最終的に子育てこそ重点課題と判断した。

2番目は合併に伴う地域間の格差解消。情報については山間地域のCATV基盤を整備して難視聴地域の解消、地上デジタル化に対応するとともに、すべての公共施設間のネットワーク化を進める。また民間バスの路線廃止が進行する中、公共交通の充実が急務。基幹バス、地域バスを拡充すると同時に、利用者の要求に応じてバスを運行させるデマンドバスシステムの導入を進める。

3番目は森林整備。豊田市全体で6万haの森林があり、その半分が人工林。何十年も手入れがしてないため災害の危険性が高く、雨は一度に流れて、安心安定した水が得られない。そこで名古屋市に近い250haの森林再生事業を行う。間伐作業のボランティアを市民にお願いしており、地主の了解を得て、作業し、市が人的、資金的に支援していく。

一中山間地の活性化も課題です。

鈴木 まちおこしと一体となった観光化を推進していきたい。まちおこしは、地域の人が主体的に考え、その知恵と技を生かす「地域分権」の考えに立ち、そこに外部者の意見や若者の考えを取り入れながら活性化や観光化を探っていく。いろいろな人々が交流しないと山間地域は活性化しない。ハコものが必要と地域が判断すれば整備していくが、その前に十分意見交換してソフトプログラムを作ってもらいたい。この地域は愛知高原国定公園、天竜奥三河国定公園に属し、香嵐溪、旭高原、面ノ木原生林、奥矢作湖など美しい自然に恵まれているし、歴史的建造物も多い。多くの魅力と可能性を持っており、地域の活性化に役立つ。

—豊田市は景観法に基づく景観計画をつくり、美しいまちづくりに乗り出しました。

鈴木 豊田市は面的整備ができていなくて、雑然としているとの批判は承知している。一つは国際感覚が、ホスピタリティを含めてまちにあるか、どうか。まずそれが欲しい。もう一つは日本の原風景を取り戻したい。国道を始めとした沿道の看板をなんとかしたい。工場には協力していただき植栽が進んだが、商業地域や空き地の看板は減らない。景観計画では重点的に景観を形成する地区を定め、行政と市民と事業所が話し合い、理解を深めてもらって、美しい景観を取り戻したい。中心市街地では、拳母神社に近い桜町商店街で行った街並み整備のように、道路幅を広げ、建物の高さをそろえるようなまちづくりを他の商店街でも行っていきたい。

—トヨタのグローバル化が進んでいます。空洞化を避けるためにも新しい産業なり、技術の創造が求められます。

鈴木 トヨタの渡辺捷昭社長が「現地化」ということを盛んにおっしゃるように、企業が海外に出れば、その地域のことを調達して、その地域の雇用を伸ばし、歓迎されなければならない。当然のことと思う。しかしそれが豊田市での生産に影響を及ぼすとは考えられないし、考えたくもないが、次世代の産業育成に向けて努力していくことは大切。多くの企業からの用地需要に応えるため、土地利用計画を考えながら産業用地の造成を進めていく。また岡崎市と豊田市にまたがった地域には愛知県企業庁が研究開発施設用地造成を推進しており、全面的に協力していきたい。この事業で新たな成長産業や技術が育つことが期待される。自動車を中心としたモノづくりから、様々な技術が生まれたように、今後エレクトロニクスやバイオなど新技術が生まれ、それが地元にも根付くことを願っている。

—ありがとうございました。